

PE投資の実務と例

西村 和夫

目 次

- 1. はじめに
- 2. PEファンドの概要
- 3. PEファンドの形態と契約
- 4. PEプログラムの構築
- 5. 終わりに

プライベート・エクイティ（PE）ファンド投資は、その独特の投資形態により、特に新たに投資を始める投資家にとって、参入障壁の高いアセットクラスとなってしまうている。本稿では、主にこれからPE投資を検討する投資家を対象に、PEファンドの運営形態、メリット・デメリット、形態と契約について基礎的な事項を述べるとともに、PEプログラム構築の手法について概説する。

1. はじめに

プライベート・エクイティ（PE）投資は、1970年代以降徐々にその存在感を増し、現在は、欧米の年金基金、大学基金、金融機関、および、各国のソブリン・ウェルス・ファンドを中心とした長期投資家の主要な投資対象としてその地位を確立している。この背景としては、流動性を犠牲にしてこのアセットクラスに投資を行ってきた投資家に対し、PEファンドが上場株式を上回るリターンを提供することによりその期待に応えてきたことがあるだろう。

一方、国内を見てみると、PE投資は2000年代

以降徐々に浸透しているものの、残念ながらまだアセットクラスとして十分な地位を確立しているとは言い難い。その要因の一つとしては、国内のPE市場が十分に成長していないことが挙げられる。日本では企業文化的な要因から、事業の売買が欧米ほど活発ではなく、また、00年代に敵対的な投資を行ったファンドがクローズアップされ（一般的にPEファンドは投資先企業に対して友好的である）、「ファンド」が企業経営者にとって好まざる存在との認識が広がってしまったことなどが、PEファンドへの投資案件供給の妨げとなってしまうている。

また、PEファンドは、通常の投資信託と異なる



西村 和夫（にしむら かずお）

野村プライベート・エクイティ・キャピタル（NPEC）運用調査部長。1990年富士銀行入社。2002年野村ファンド・リサーチ・アンド・テクノロジー入社。野村プライベート・エクイティ・キャピタル（旧プライベート・エクイティ・ファンド・リサーチ・アンド・インベストメンツ）設立に伴い08年2月より現職。90年東京大学工学部物理工学科卒業。96年シカゴ大学院ビジネススクール修了。CFA協会認定証券アナリスト、気象予報士。